

『伊勢物語』の心の具象化

——業平歌の章段を中心に——

藤河家 利 昭

はじめに

『伊勢物語』では主人公の心がどのように表わされているかを具体的に跡付けてみたい。この物語では業平の歌を持つ章段が中核をなし、その業平の歌は心の表わし方が問題にされたからでもある。ここでは業平の歌を持つ章段を中心にして『古今集』と比較しながらその特色を捉えることにする。従来、『伊勢物語』の歌は『古今集』に対して、「人間の生き方といかに濃密にかかわるものかということ」^{注1}を追求した、また「主人公の思惟、行動の軌跡を集約的に追尋する性格」^{注2}を持つと説かれている。ここでは初段と二段の意図するところに導かれて主人公の心の表わし方に二つの方法があることを見出し、さらにそれぞれにおいて序詞、枕詞、比喩、見立て、擬人法、懸詞（物名）、言葉

の意味の転用などによって心が具象化されていることを明らかにしたい。主人公の心が具象化されることによってその人物像も鮮明になって来ると思われるのである。なおここでは成立論には関らないものとする。

一、初段と二段の意図

初段は業平の歌を用いてはいないが、「みやび」の問題は別として、二段と共に『伊勢物語』全体の方向を示すと考えられるので少し触れておきたい。初段では、元服した男は春日の里に行き、そこでなよやかに美しい姉妹を見て心が乱れ、狩衣の裾に次の歌を書いて贈る。

春日野の若紫の摺衣しのぶの乱れ限り知られず^{注3}

この歌を即座に（何はともあれその折を逃さないで）^{注4}言いやった男の心持ちを、作者は「ついでおもしろきことと

や思ひけむ」と批評している。またそれに次いでこの歌を「陸奥の信夫もぢ摺り誰ゆゑに乱れそめにしわれならなくに」といふ歌の心ばへなり」と説明している。この歌は『古今集』恋四の源融の歌で、四句が「乱れむと思ふ」となっている。^{注5}物語の歌に合わせて「乱れそめにし」としたのである。この「ついでおもしろきこと云々」には様々な解がある。一方ではこれを歌を受け取った女の感想とするもの。^{注6}また古注には女が源融の歌を返歌に用いることとするものもあるが、普通には、男が右の歌を詠んでやった事情を言うものとして、「信夫摺の狩衣」を着ていたこと^{注8}からそれにちなむ歌を詠んでやったこととされている。^{注9}ただこれには難点があって、歌の前に書かれていることと重複する感があると指摘されている。この他にも右の歌を詠む事情を言うことに加えて、男が融の歌をふまえて詠んだこととするものもある。^{注10}

ここでは通説というべきものに立って、「信夫摺の狩衣」の模様「信夫の乱れ」によってわが心の限りなく「乱れ」を表わすことが出来る、しかもそれを過不足なくびったりと出来るということを言ったものと考えてみたい。そして、この場合それが出来たのは、序詞を用いて「信夫の乱れ」を導き、それによって心の「乱れ」を譬えたからである。

従って、融の歌はこの「信夫の乱れ」が、「信夫もぢ摺り」によって心の「乱れ」を表わすことを示すための「証歌」^{注11}として引かれたものである。そこでは同じく序詞がそれら結び付けている。その一方、物語の歌では、融の歌にない、序詞で姉妹を「春日野の若紫」に譬えることもしている。

以上のことからすると、作者の関心は、主人公の心を具象化することに向けられているように見える。しかもこの場合、それは実に都合よく行われたと作者はするのである。そしてそれが出来たのは、よく知られた『古今集』歌を前提にするという条件の下である。つまり、相手との共通理解の上で立っていることになる。またそれに関連して、相手が「女はらから」で、複数であることも男の心がそれだけ外に開かれていることを示すであろう。こういうことから男はここでは即興の才を示す歌詠みとして登場していることになる。最後の一文の「いちはやきみやび」(恋心を抱くやその赴くままに直ちに歌を通してそれを伝えることであろう)^{注12}をしたというのも、そういう男の行動を支えるべく、物語の主人公としての人物像を提示したのである。

業平の歌が最初に用いられるのは二段である。石田稷二氏は、初段と二段との間には密接な繋がりがあることを指摘されている。^{注13}二段は、初段とはまた違った意味で、この物語の方向を示していると考えられる。二段では、男は西の京の女に少し親しく話をして帰って来て、三月の初旬の雨がしとしと降る折に次の歌をやる。

起きもせず寝もせず夜を明かしては春のものとしてながめ暮らしつ

この歌は『古今集』恋三では作者業平とし、詞書が「弥生の朔日より、忍びに人にもら言ひて後に、雨のそほ降りけるに詠みて遣はしける」とある。昨夜秘かに女に話をし^{注15}て、起きるでもなく寝るでもなく、夢うつつに夜を明かし、昼は昼で春にはつきものだと思つて長雨を眺めながら一日を暮らしたというのである。作者はどうしてこういう遣る瀨ない思いをするのか分らないが、ともかくこれは春にはつきものだからと自らに言い聞かせている。作者の遣る瀨ない思いは、一応春のものとしての「眺め（長雨）」に収束がはかられていると見られる。

物語では、この歌を詠んでやった男の心持ちを、作者が「いかが思ひけむ」と評している。これは初段の「ついでおもしろきこと云々」と対応していると考えられる。^{注16}そこ

では「信夫の乱れ」によって心の「乱れ」を都合よく表わせることを言う^{注17}と見た。しかし、ここでは作者は男の心持ちをはかりかねるものとして、結局読者の想像に委ねた恰好である。これについても様々な解があるが、歌を詠んだ男の心持ちとして、女が独身でもなかったことを思うとするもの^{注18}、男が女を恋しく思うことを言うとするもの、さらに男がこういう歌をやったのはどういふつもりだったのかとするもの^{注19}などがある。ここでは、どうしてそういう歌を詠んだのか、その心持ちがはかりかねるとした裏に、初段とは違う都合の悪い事情が込められていると考えてみる。

物語では、女について、世の女にはまさっている、容貌よりは心がまさっている、独身でもなかったらしいと述べる。そういう女に逢つて話をし、帰つて来て詠んだ歌の、殊に下旬、長雨は春につきものだと思つてその眺めに目を暮らしたとはちぐはぐな結末と言うべきであろう。「春のものとして」は女を思う歌としてはそぐわない感を否めない。男自身、春のものとしての「眺め（長雨）」にそぐわないものを感じていたのではなからうか。男は長雨に寄せてわが心を表わしたが、それは意に添うものではないだけでなく、かえって齟齬を生じたのである。そして、そこにこ

そ男の名状しがたい思いが込められていると見るべきなのである。男は男なりに女の側の事情を誠実に受けとめているのであり、そこに「かのみめ男」と呼ばれるゆえんがあるろう。これは初段の「いちはやきみやび」をやつてのける男とは対照的である。ここでは相手と共通の立場に立つて相手に働きかける男の姿が描かれているが、ここでは他者が簡単に窺いえない男の独自の内面が追求されるのである。これはこの物語の二つの方向をも示していると考えられる。

ところでここで使われた懸詞は、長雨に寄せてわが心を表わそうとしたのであるが、結果としては主人公との間に齟齬を生じさせている。従ってここでは春のものとしての「眺め(長雨)」が物指しとなつて、それとむしろ齟齬する形で、心が具象的に表わされると言えよう。これは『古今集』の方向とは異なるもので、業平の歌の「言葉」にならない「心」を出来るだけ掬いとりとうとする試みであると思われる。

二、序詞、枕詞の使い方

初段の歌に序詞が用いてあったので、序詞の使い方から見ていく。またそれに似た働きを持つものとして枕詞もこ

こで扱うことにする。

まず序詞である。九段は四段落からなるので一応分けて取りあげる。九段の八橋の段では、男がわが身を必要のないものと考えて、京には住まないで、東国に住むことが出来る国を求めようとして旅に出た。八橋に来て、その沢にかきつばたが咲いているのを見て、ある人が「かきつばたといふ五文字を句の上に据ゑて旅の心を詠め」と言ったので次の歌を詠んだ。

唐衣着つつなれにしつましあればはるるきぬる旅をしぞ思ふ

『古今集』羈旅では作者業平として、詞書も大体同じような事情を伝えるが、東国へ行ったのは特に目的があるのではなく、かきつばたを歌に詠むのも作者の意志から出たことである。また物語では歌の後に「と詠めりければ、皆人乾飯の上に涙落としてほとびにけり」と続く。これは、歌を詠むことを求められたのと応じて、この歌が皆の心をも表わしたものであることを示している。男はわが身を「要なきもの」と考え、京にはいまいとした以上、わが身を京に繋ぎとめるものはなかった筈であり、またあつてはいけなかつたのである。しかし、妻への愛着の心まで断つていくわけではない。それがかきつばたに触発されて一挙に表

に出て来るのである。この歌は折句の歌であると共に、序詞（「唐衣着つつ」）を用いて「褻れ」を引き出し、それに「馴れ」を懸けて、以下「妻（褻）」、「遙々（張る張る）」、「来（着）」と繋いでいる。つまり、妻への愛しさとそれゆえの旅の遠さを思う心とが、着なれた衣を洗い張りして着ることに重ねて表わされているのである。これは旅の必要に迫られたことである。男の心、ひいては皆の心が現実的なものによって具象化されるのである。これは初段と同様、物に寄せてわが心を都合よく表わした例である。業平の歌で序詞を用いるのはこの一例だけである。なお次の宇津の山の段では、「駿河なる宇津の山辺の」という序詞が用いられ、やはり具体的な山の様子を表わしていると見られる。

業平の歌でないと見られる歌で序詞を用いるものを、この八橋の段のように物に寄せてわが心を都合よく表わした例と、物に寄せてわが心を表わしてもそれが齟齬を生じている例とに分けてみる。これはその段、または段落の中心的位置にあり、男女主人公の心を具象化している歌に限る。

前者：「駿河なる宇津の山辺の」（九段・宇津の山の段）、
「武蔵鏡」（十三段）、「信夫山」（十五段）、「中空に

立ちゐる雲の」（二十一）段、「風吹けば沖つ白波」（二十三）段、「舟さす棹の」（三十三）段、「海人の刈藻に宿るてふ」（五十七）段。以上、計7例。

（※印は女の歌である。）

後者：「いにしへのしづのをだまき」（三十二）段、「谷せばみ峯まではへる玉蔓」（三十六）段、「波間より見ゆる小島の浜びさし」（百十六）段、「山城の井手の玉水手に掬び」（百二十二）段。以上、計4例。

前者は初段の歌や業平の歌も加えれば九例になる。両方の合計は十三例になる。前者では、その土地の地名や光景を詠み込んでいるように相手または他者と同じ立場に立って序詞を用いている。結果も、よかった仲が疎くなる例（二十一）段）もあるが、離れた仲がもとにおさまる例（二十三）段）や、歌が相手を感じさせる例（十五）段）、よい評価を得る例（三十三）段）が目立つ。女の歌は三例ある。また贈答歌（いづれも答歌）が三例ある。そして、前者は全て奇数章段である。後者では、相手だけではなく当人も直接関わりを持たないような序詞もあり、相手と同じ立場に立っていない。結果も、相手に何の反応も与えない例（三十二）段、百二十二）段）がある。また序詞以下の部分で否定表現が使われることが多い（三十二）段以外の例）。女の歌や贈

答歌はない。そして、後者は全て偶数章段である。序詞を用いた歌に前者が多いのは、序詞が実際の場面と密接に関る場合が多いからであろう。

次に枕詞の用い方を見ていく。枕詞を用いた歌も業平には一例のみである。百六段を掲げる。

昔、男、親王達の逍遙し給ふところにまうでて、龍田川の辺りにて、

ちはやぶる神代も聞かず龍田川からくれなるに水くるとは

この歌は『古今集』秋下に作者業平として、詞書が「二条後の春宮の御息所と申しける時に、御屏風に龍田川に紅葉流れたる形をかけりけるを題にて詠める」とある。『古今集』では、屏風の絵を題にしたものであり、またそういう風景の絵であったことから下句の見立ての面白さに眼を向けさせている。物語では、実景であり、しかも紅葉のことには触れていない。ここではそのことを前提にした上で、こういう風景に接した男の心の方に関心が向かっていると見るべきであろう。「ちはやぶる」は枕詞として「神代」にかかるだけでなく、文字通り神威の盛んなどという意で用いられ、それは下句にも及んで、韓紅に水を括り染めにす

ることもその靈妙な仕業としてしている。「ちはやぶる神代」は男の驚きを表わすのに持ち出されたのであるが、「聞かず」と否定表現になっていてそれとは齟齬する形で驚きが表わされている。そういうふうにして親王達に対する祝意を表わしたのである。以上のように、枕詞も心を具象化する役割を持つ。

業平の歌でないと見られる歌で枕詞を用いる例を、物に寄せてわが心を都合よく表わしているものと、物に寄せてわが心を表わしてもそれが齟齬を生じているものとに分ける。

前者：「玉鬘」(二十一 段前半)、「ちはやぶる」(七十一 段)、「端籬の」(百十七 段)、「初草の」(四十九 段)。

以上、計4例。

後者：「若草の」(十二 段)、「梓弓」(二十四 段)。以上、計2例。

後者は業平の歌も加えれば三例になる。両方で七例となる。前者の百十七段は住吉の神の歌である。前者は半数が、後者は二例が女の歌であり、割合として高い。枕詞は両方共場面や相手の歌に関するもので、大きな違いはない。前者では一例(二十一 段)を除いて全て贈答歌であり、後者では一例(二十四 段)である。また後者では、枕詞に直

接続部分で逆接表現（二十四段）が見られる。結果を見ると、前者では、相手の心をそのまま受け入れた（七十一段）、相手の心に和したりする（百十七段）のに対して、後者では、追手に捕ったり（十二段）、男を引きとめることが出来なかつたり（二十四段）している。

三、比喩の用い方

序詞や枕詞も比喩の働きを持つが、ここではその関連で比喩の用い方を見ていく。

まず他の物にたとえてわが心を都合よく表わしている例である。五段では、男は東の五条辺りに忍んで通うが、主が聞きつけて番人を置いたので逢えなくなつて次の歌を詠む。

人知れぬわが通ひ路の関守はよひよひごとのうちも寝
ななむ

これは『古今集』恋三に作者業平として、詞書もほぼ同様の事情である。物語では歌の後に「と詠めりければ、いといたう心病みけり。主許してけり」と続き、歌が女の心を痛めさせ、それが主をも動かしたとする。ひそかな通い路の番人を関守にたとえて、夜毎に少しでも寝てほしいという痛切な思いが女をうったというのである。ところでこの

「関守」のたとえは、この家の荒れた感じや人数の少ない様子からすると必ずしも適切であるとは言えない。むしろ大仰な感もある。しかし、最後に「二条の後に忍びて参りけるを、世の聞こえありければ、兄人達の守らせ給ひけるとぞ」という事情が示されることで、それはまことに適切であつたことになる。この部分がなければ歌が意味を失うことになるであろう。二条の後にひそかに通う話を表に立てて語ることが出来ないという事情もあるが、歌の効果をあげる意図も考えられるのである。

四十一段では、妻の姉妹で身分が低く貧しい夫を持つ女が、袍を洗い張りして破ってしまったと聞いて、身分ある男が袍をさがし出して贈る時に次の歌を詠む。

紫の色濃き時は目もはるに野なる草木ぞわかれざりけ
る

これは『古今集』雑上に作者業平として、詞書が「妻のおとうとをもて侍りける人に、袍を贈るとて詠みてやりける」とある。これは夫の方に贈つたのである。物語では歌の後に「武蔵野の心なるべし」と、作者の説明があり、この歌が『古今集』雑上、読人知らずの「紫の一本ゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」と同じ意であるとする。このことは同時に、初段の源融の歌と同じく男の歌が

相手との共通理解に立つものであることを示す。『古今集』
読者知らず歌では、「紫」が染料となるので衣と関係を持つ
つが、物語の歌では「野なる草木」が「いと清らなる緑衫
の袍」をふまえている。単に妻の姉妹の比喻としてだけで
なく実際の場面との繋がりを求めているのである。

五十一段を掲げる。

昔、男、人の前栽に菊植ゑけるに、

植ゑし植ゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根

さへ枯れめや

この歌は『古今集』秋下に作者業平として、詞書が「人の
前栽に、菊に結びつけて植ゑける歌」とある。『古今集』
では菊の歌にとどめていと見るべきであろう。物語で
は、秋のある限り花が咲くであろうと、花は散っても根
まで枯れることはない、菊に寄せてその人への変わらぬ
心を強調している。

百三段では、男はまじめで実直、浮いた心がなく、深草
の帝に仕えていたが、まぢがい心から親王達のお使いに
なっている人と語り合って次の歌を詠んでやった。

寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもな
りまさるかな

この歌は『古今集』恋三に作者業平として、詞書が「人に

逢ひて朝に詠みて遣しける」とある。物語では歌の後に
「さる歌のきたなげさよ」という作者の批評がある。これ
は女との逢瀬を夢にたとえ、そのはかない夢を追い求める
ように女との逢瀬のさまをたどろうとするところを言うの
であろう。その夢を追い求めようとする心は、「いとまめ
にじちようにて、あだなる心なかりけり」という男の人柄
とは際立った対照をなす。まさに「心あやまり」をした歌
なのである。

これまでは一首の歌からなる段であったが、八十三段は
二首の歌からなる。前半では、惟喬親王が水無瀬に狩に行
かれたお伴に、馬頭の翁が仕えていた、数日して宮に帰ら
れたので早く帰ろうとしたがお帰しにならない、そこで馬
頭が次の歌を詠む。

枕とて草引き結ぶこともせじ秋の夜とだに頼まれなく
に

これは業平の歌ではないが、後の歌と関連するので触れて
おく。歌の後に「親王おほとのごもらで明かし給うてけ
り」とある。親王は馬頭の歌にもまた興を覚えて一夜を明
かしたというのであろう。「枕とて草引き結ぶ」は宮に泊
ることをたとえたもので、今は三月の下旬で秋の夜のよう
にでもあてに出来ればいいがそうはいかないから飯の旅寝

もしたくない、それさえ惜しいと言ったのである。親密な主従の間の、遠慮のない言い方に親王はますます馬頭を帰したくなくなったのである。後半では、思いがけず出家された親王を、一月に雪をおかして小野の御室にうかがい、昔の話などをお聞かせしてやむなく帰る時に次の歌を詠み、泣く泣く帰って来る。

忘れては夢かと思ふ思ひきや雪踏みわけて君を見む
とは

この歌は『古今集』雑下に作者業平として、詞書もほぼ同様の事情を述べるが、親王に逢った作者の心情を、「つれづれとしていとも悲しくて」とし、歌も帰って来て贈ったものとする。物語では右の部分に当たるところは、「つれづれといとも悲しくておはしましければ」と、親王の様子を述べたもので、歌も帰る時に詠んだのである。物語は、翁の心を歌の表現自体に見ようとし、また親王に逢った時の翁の心をそのまま伝えるものとしてこの歌を見ていると言えよう。ところで、前半の歌には「枕とて草引き結ぶこともせじ」とあったが、ここでは眼前のありさまが夢ではないかと思うとしている。寝ているわけでもないのにこれが夢の中の出来事のようにあるとこの歌である。そういう関連があるとすれば、作者は、親王と逢っていること

を夢にたとえて、今のことが信じられない翁の心を表わしている点に目を向けていると考えられる。

次は贈答歌の例である。十九段では、男は宮仕えをする女の許で御達と親しくなったが間もなく離れる、女の目には見えても男は無視している、という具合で女と男のやりとりがなされる。

天雲のよそにも人のなり行くかさすがに目には見ゆる
ものから

なり
天雲のよそにのみして経ることはわがるる山の風早み

『古今集』恋五では、この贈答歌に「業平朝臣、紀有常が女に住みけるを、恨むることありて、しばしの間、昼は来て夕ざりは帰りのみしければ詠みて遣しける」という詞書があり、返しの業平の歌も一二句が「行き帰り空にのみして」とある。『古今集』では初めに男に「恨むることありて」という事情があったことを示している。物語ではそれに当たることを、男の歌の後に「と詠めりけるは、また男ある人となむ言ひける」と、その説明として示している。

『古今集』では両歌は対等の立場に立って詠まれる。しかし、物語では、男の歌の一二句が女の歌とほぼ同じであるように、男の歌は女の歌の意を上句で受け直し、それを前

提にして下句以下を述べるのである。即ち、男を「天雲」にたとえたことを受けて女に別の男がいることを山の風が早いことにたとえ、男の、女の許に落ち着けない心を表わすのである。従って「また男ある人云々」は、歌の意味を示すだけでなく、男の歌の下句の部分に中心があることも示しているのである。

六十九段では、男は伊勢の国に狩の使として赴き、斎宮が親の言葉に従ってこの男をよくもてなしたので二人は逢うことになる、女が男の許を訪れたが、まだ何の語らいもしないうちに女が帰ってしまった、その翌朝、女と男のやりとりがなされる。

君や来しわれや行きけむ思ほえず夢かうつつか寝てか
覚めてか

かきくらす心の闇にまどひにき夢うつつとは今宵さだめよ

この贈答歌は『古今集』恋三に作者読人知らずと業平として、詞書も骨子は似ているが、「いとみそかに逢ひて」とする点が違う。また返し業平の歌も五句が「世人さだめよ」となっている。「心の闇」は、女の歌を受けて、昨夜はどういうことだったのか全く判断がつかないという心を闇にたとえたものである。その際物語の「子一つより丑三

つまであるに、まだ何ごとも語らはぬに帰りにけり」とする方が、この「闇」というたとえが具体的に受けとめられるのではなからうか。この時間設定は夜の闇の深い時を言うのでもあろう。そして、何の語らいも出来ないのは闇をたどるような心持ちであろう。そうすると、女の歌もそうとれるのだが、この「心の闇」は逢っても逢ったとは言えない逢瀬に心が乱れて暗くなることを指すと思われるのである。「今宵さだめよ」と、もう一度逢瀬を求めることとの繋がりもよい。これを受けてその後では、男はその夜逢おうとするが国守との酒宴があつてどうしても逢えない、明け方に女から盃の皿に歌の元を書いて出したのでそれに末を付ける。

かち人の渡れど濡れぬえにしあれば

また逢坂の関は越えなむ

これは業平の歌ではないが前と関連するので触れる。女は、かち人が江を渡ることにとたえて二人の仲を浅い縁であったとするが、これには前を受けて、逢っても何の語らいもない縁という意を込めたのである。男はむしろその意を受けて、逢えそうに逢えない仲を「逢坂の関」にたとえた。逢坂の関は再び伊勢の国を訪れる時に越えるのである。また最後の「斎宮は水の尾の御時、文徳天皇の御女、

惟喬の親王の妹」という注記の一文も、業平と齋宮とが縁続きであることからこの逢坂の関を事実関係に結び付けようとしたものと考えられる。

次は贈答歌と一首の歌とからなる段である。百七段の前半では、身分ある男の許にいる女に藤原敏行が求婚したのに対し男が女の代作をする、そのやりとりである。

つれづれのながめにまさる涙河袖のみひちて逢ふよし
もなし

浅みこそ袖はひつらめ涙河身さへながると聞かば頼ま
む

この贈答歌は『古今集』恋三に作者敏行と業平として、詞書も骨子は同じであるが、敏行の歌の四句が「袖のみ濡れて」となっている。物語では、男の歌が敏行の歌により即した形になっているのである。また男の歌の後には「と言へりければ、男いといたうめでて、今まで巻きて文箱に入れてありとむ言ふなる」とある。同じ「涙河」の比喩を用いながら、「袖のみひちて」を「身さへながる」に転じたところに巧みさがある。後半では、敏行がこの女を得て後に「雨が降りそうなのでどうしようかと迷っている。身に幸があればこの雨は降るまい」と言って来たので男が代作をする。

かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身をしる雨は降りぞ
まされる

この歌は『古今集』恋四に作者業平として、詞書もほぼ同じ事情を述べるが、物語の「身さいはひあらばこの雨は降らじ」という部分はない。また前の贈答歌と関連を持たされていない。物語では男の歌の後に「と詠みてやれりければ、蓑も笠も取りあへて、しとどに濡れてまどひ来にけり」とある。「身をしる雨」は、敏行の言葉を受けて、涙を雨にたとえ、身の不幸が思い知られる雨としたものである。これは前のやりとりの「涙」と関連を持つが、特に敏行の歌の「つれづれの眺め（長雨）にまさる涙河」を受けている。

以上、比喩を用いてわが心を都合よく表わしたものは九例にのぼる。ここで用いられる比喩は、単なる比喩としてではなく、実際の場面やその事情と密接な繋がりを持つ。それによって主人公の心が具象化されるのであり、作者もそこに関心を注いでいる。ここには『古今集』歌をふまえた例（四十一段）が見られる。また贈答歌が三例（十九段、六十九段、百七段前半）ある。結果も、歌を非難される例（百三段）もあるが、歌が讃められる例（百七段前半）、相手を動かす例（百七段後半）、二人の仲が好転する例（五

段)などが目立つ。なお比喻を用いてわが心を表わしてもそれが齟齬を生じる例は業平の歌には見られない。

業平の歌でないと見られる歌で比喻を用いるものを、わが心を都合よく表わしている例と、わが心を表わしても齟齬を生じている例とに分けてみる。

前者：「忘草おのが上にぞ生ふ(忘れられること)」(三十一段)、「玉の緒を沫緒に縋りて結べれば(二人の仲)」(三十五段)、「目には見て手には取られぬ月の中の桂(女)」(七十三段)、「袖の雫(世の人のつらき心)」(七十五段)、「千尋ある蔭(御子)」(七十九段)、「雪の積もる(わが心)」(八十五段)、「天の河隔つる関(物越し)」(九十五段)、「咲く花の下に隠るる人を多みありしにまさる藤の蔭(太政大臣の栄花の盛りにみまそがりて藤氏の殊に染ゆる)」(百一段)、「白露(男)」(百五段)。以上、計9例。

後者：「紅にほふが上の白菊(折りける人の袖)」(十八段)、「港(涙)」(二十六段)、「玉の緒(逢ふこと)」(三十段)、「誰が通ひ路(他の男が通うこと)」(四十二段)、「草の庵(袖)」(五十六段)、「昔の人の袖の香(五月待つ花橘の香)」(六十段)、

「岩根踏み重なる山(逢はぬ日多く恋ひわたる)」(七十四段)、「岩(色見えぬ心)」(七十八段)、「桜花(女)」(九十段)、「蘆辺漕ぐ棚無し小舟(男自身)」(九十二段)、「紅葉・花(今の男・前の男)」(九十四段)、「雲には乗らぬ(そむく)」(百二段)、「蛙のあまた鳴く田(多くの男が泣くこと)」(百八段)、「須磨の海人の塩焼く煙(女)」(百十二段)、「玉蔓はふ木あまた(男)」(百十八段)。以上、計15例。

前者は業平の歌九例、またその章段に含まれる業平以外の歌二例(歌の末の例も含む)を合わせると二十例になる。両方合わせると三十五例である。比喻として用いられるものの中、自然物の占める割合は、前者が業平の歌の五例も加えて十一例、後者が八例で、いずれも半数位である。前者では贈答歌が一例である。ただし相手の言葉に答えた形になっている例が二例(三十一段、百五段)ある。また題を出されて詠むのが二例(八十五段、百一段)ある。女の歌は二例(九十四段、百十八段)である。結果も、相手を感動させる例(八十五段)や二人の仲が進展する例(九十五段)、また歌が評価を受けたと見られる例(百一段)などがある。後者では贈答歌が三例(十八段、九十

四段、百八段）あるが、その中十八段は「知らず詠みに」、百八段は「聞きおひける」とある。歌を求められて詠むのも一例（七十八段）ある。女の歌は二例（九十四段、百十八段）である。また比喻によって述べられることに對する否定表現（二十六段、九十二段、百十二段、百十八段）や逆接表現（九十段）、さらにその二つを合わせた表現（五十六段、七十四段、七十八段、百二段）が見られる。結果も、尼になる例（六十段）や女が他の男と結ばれる例（百十二段）がある。概して二人の仲は進展していない。

四、見立ての用い方

比喻に近いものとして見立ての用い方を見ていく。見立てを用いてわが心を都合よく表わす例である。十七段を掲げる。

年頃訪れざりける人の、桜の盛りに見に来たりければ、
主、

あだなりと名にこそ立てれ桜花年に稀なる人も待ち
けり

返し、

今日来ずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありと
も花と見ましや

この贈答歌は『古今集』春上に作者読人知らずと業平として、詞書が「桜の花の盛りに、久しく訪はざりける人の来たりける時に詠みける」とある。物語では、「年頃」とあり、しかもその人は桜の盛りに合わせてやって来たという意味合いが強く出る。そうすると、主の歌の、一年にめつたに出来ない人でもお待ちしていたというのは抛り所が弱くなる。答えの歌の方に中心があるのである。この答えの歌では、今日の限りで主の言い分を一応認め、明日については相手が「あだ」と言ったのを捉えて、桜の花が散るのを雪が降ることに見立てている。またそうすることによって以下の、それが消えずに残っていても花と見ることは出来ないという意を支えている。

八十七段は四首の歌からなるが、初めの二首を取り上げる。男は蘆屋の里に行つて住むが、この男は宮仕えとも言えない宮仕えをしていたのでその縁で衛府の佐達が集まつて来る、この男の兄も衛府の督である。布引の滝を見に登つて皆に滝の歌を詠ませる。衛府の督と主の歌である。

わが世をば今日か明日かと待つかひの涙の滝といづれ
高けむ

ぬき乱る人こそあるらし白玉のまなくも散るか袖のせ
ばきに

後の歌は『古今集』雑上に作者業平として、詞書も骨子は同じ事情である。また前の歌とは関係がないが、『古今集』では業平の歌の前に行平の歌があって、詞書を「布引の滝にて詠める」とし、「こき散らす滝の白玉拾ひおきて世の憂き時の涙にぞ借る」とある。物語では主の歌の後に「と詠めりければ、かたへの人笑ふことにやありけむ、この歌にめでてやみにけり」とある。この主の歌は「さる滝の上に円座の大ききしてさし出でたる石あり。その石の上走りかかる水は小柑子、栗の大ききにてこぼれ落つ」という光景を詠んだものである。即ち「白玉」は滝の水を、また「袖」はさし出した石を見立てている。それが側にいた人の笑いを誘ったのであろう。その一方で、「白玉」は、『古今集』の行平の歌のように、前の歌を受けて涙を見立てたものである。またこの歌は、初めに蘆屋の里を説明するために昔の歌として引かれた「蘆の屋の灘の塩焼き暇なみ黄楊の小櫛もささず来にけり」（『万葉集』卷三の石川少郎の歌の類歌と見られる）と不遇意識の上で通じるものがある。「白玉」は「黄楊の小櫛」に当たるのであろう。その土地を詠んだ古歌とも関連を持たされているのである。なお三首目では漁火を「星・螢」に、四首目では海松を「わだつみのかざし」に見立て、特に四首目は内容的な関

連がある。

以上、見立てを用いた業平の歌は二例で、いずれもわが心を都合よく表わしているものである。齟齬を生じる例はない。見立ても相手の歌や場面と密接に關つていて主人公の心を具象化していると考えられる。

業平の歌でないと思われる歌で見立てを用いるものを二つに分けてみる。

前者：「天の河とわたる舟の櫂の雫（水）」（五十九段）、

「塩釜（左大臣の家）」（八十二段）、「晴るる夜の

星・河辺の螢（海人の焚く火）」（八十七段二段目）、

「わだつみのかざし（藻）」（八十七段三段目）。以

上、計4例。

後者：「秋や来る露や紛ふ（涙）」（十六段）、「天つ空なる露（涙）」（五十四段）。以上、計2例。

前者は業平の歌二例も加えると六例になる。両方合わせると八例である。ここでは自然物は前者に二例、後者に二例である。前者では業平の歌に贈答歌一例、皆同じ題で詠むのが一例あったが、ここでも後からではあるが皆と同じ題で詠むのが一例（八十一段）ある。女の歌は一例（八十七段三段目）ある。結果も、業平の歌に歌が讃められるのが一例あったが、ここでも相当の評価を受けたと見られるの

が一例（同）ある。

五、擬人法の用い方

比喩や見立てに近いものとして擬人法の用い方を見ていく。

まず擬人法を用いてわが心を都合よく表わしている例である。九段の隈田河の段では、男達は限りなく遠くへ来たことを嘆き合い、川を渡ろうとして皆何となくつらく京に思う人がないわけでもない、ちょうどその折に都鳥を見て男が次の歌を詠む。

名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

この歌は『古今集』「羈旅」に、前の「唐衣」の歌と並んで作者を業平とし、詞書も物語とほぼ同じ事情を述べる。物語では歌の後に「と詠めりければ、舟こぞりて泣きにけり」とある。これも擬人的表現であるが、歌では「都鳥」を擬人化し、都のことをよく知っているものとして思う人の安否を問う。そこにそれでもする外はない男の痛切な心が托されるのである。また都鳥を心あるものとして呼びかけるのは、この前の富士の山の段で富士の山を「時知らぬ山」とすることと関連している。さらに歌の内容では、八橋の

段が都に残して来た妻があるので旅の遠さが思われるとしたことをふまえ、旅がますます遠くなったのに応じて思う人の安否を気遣うのである。

九十七段では、堀河の大臣の四十の賀が九条の家でなされた日に中将である翁が次の歌を詠む。

桜花散りかひ曇れ老いらくの来むといふなる道まがふがに

この歌は『古今集』賀に作者業平として、詞書もほぼおなじ事情である。ただ物語では「中将なりける翁」としている。桜の花に呼びかけて老いの来る道をわからないようにしてほしいと言うのであるが、当人が已に翁であることでその呼びかけは現実味を帯びたものになると考えられる。以上、二例である。

次に擬人法を用いてわが心を表わしてもそれが齟齬を生じている例をあげる。七十六段では、二条后がまだ東宮の御息所と申した時、氏神に参詣なさり、近衛司に仕えていた翁が御車から祿を賜って次の歌をさしあげる。

大原や小塩の山も今日こそは神世のことと思ひ出づらめ

この歌は『古今集』雑上に作者業平として、詞書も骨子は同じである。ただ后と翁の個人的な関係は仄めかされてい

ない。また歌の後には「とて心にも悲しとや思ひけむ、い
かが思ひけむ、知らずかし」とある。これは二段と同様に
歌を詠んだ男の心持ちを作者が測りかねるとしたものであ
る。これはこの歌の、大原野の神も東宮の御息所の参詣を
迎えて天孫降臨の昔を思い出されているだろうという表の
意とは別に、后もわれわれの過去の事を思い出されたであ
らうという意を込めたものであることを示している。その
二つの意を重ねる役割を歌においては擬人法が持つてい
る。以上、一例のみである。

次に業平の歌でないと見られる歌で擬人法を用いるもの
を、わが心を都合よく表している例と、齟齬を生じている
例に分ける。

前者：「時知らぬ(富士の山)」「九段富士の山の段)」、「雲
な隠しそ(生駒山)」「二十三段後半)」、「諸声に泣
く(蛙)」「二十七段)」、「なほ頼む(庵多きしでの
田をさ)」「四十三段)」、「受けずもなりにける(神)」「
(六十五段前半)」、「いざなはれつつ(見まくほし
さ)」「六十五段後半)」、「花の林を憂し(雲)」「(六
十七段)」、「春の別れを訪ふ(山)」「(七十七段)。

以上、計8例。

後者：「見やはとがめぬ(浅間の岳)」「(八段)」、「いつか

忘れむ(たのむの雁)」「(十段)」、「都のつとにいざ
と言はましを(栗原のあねはの松)」「(十四段)」、
「待ててふことを聞く(行く水・過ぐる齢・散る
花)」「(五十段)」、「誰が許さばか隙求むべき(風)」、
「(六十四段)」、「思ひあまり出でにし(魂)」「(百十
段)」、「今日ばかりとぞ(鶴)」「(百十四段)。以上、
計7例。

前者は業平の歌の二例も加えると十例、後者は業平の歌の
一例も加えると八例になり、両方合わせると十八例であ
る。業平の歌も併せて両方共自然物を擬人化しているもの
が大部分である。前者では贈答歌は二例(二十七段、四十
三段)、題を出されて詠むのが一例(七十七段)ある。業
平の歌には賀の席で詠むものがあつた。女の歌は一例であ
る。結果も、皆を感動させるのが一例(九段隈田河の段)、
その当時は人を感心させるのが一例(七十七段)、また二
人の仲を好転させることに繋がると見られるのが一例(二
十三段後半)ある。後者では贈答歌は四例(十段、十四段、
五十段、六十四段)あるが、実のある答えではないと見ら
れる例(十段)、相手が取り違いをする例(十四段)、浮気
の張り合いをする例(五十段)がある。他に後者には反実
仮想の表現(十四段)や反語表現(八段、五十段、六十四

段)が見られる。結果も先の取り違いの外に、帝の機嫌を損ねる例(百十四段)もある。

以上の比喩、見立て、擬人法を合わせてみると、前者の例が業平の歌では十三、業平の歌でないから見られる歌では二十三、後者の例が業平の歌では一、業平の歌でないから見られる歌では二十四となる。業平の歌が大きく前者に片寄っていることがわかる。

六、懸詞(物名)の用い方

二段の業平の歌に懸詞が用いられていたが、ここでは懸詞と、それに関係の深いものとして物名の用い方を見ていく。まず懸詞を用いてわが心を都合よく表わしている例であるが、これは業平の歌にはなく、それと贈答歌になっている女の歌に見られる。

二十五段では、逢わないとも言わないが、いざとなると逢わない女とのやりとりがなされる。

秋の野に笹わけし朝の袖よりも逢はで寝る夜ぞひちま
さりける

みるめなきわが身をうらと知らねばや離れなで海人の
足たゆく来る

これは『古今集』恋三の業平と小野小町の歌であるが、も

とは贈答歌として詠まれたものではない。業平の歌では四句が「逢はで来し夜ぞ」となっている。これでは女の許から帰って来たことになるので、物語では女の歌の下句にある「足たゆく来る」に合わせて「寝る」としたのであろう。

また、物語の設定からすれば、男の歌の上句は女に逢って帰って行く時のことではなく、袖がよく濡れる例として引き合いに出されたものである。女の歌では「海松布」に見る目を懸けて、海松布のない浦であると知らないで海人が足のだるいまでやって来るように、あなたは逢う気のない私を厭なもの知らないからやって来るのだと言う。歌の前には「色好みなる女」とあるが、逢う気もないのに男を引き寄せておくからであろうか。この懸詞によって女自身よりもむしろ女から見た男の心を具象化して捉えている。九十九段では、右近の馬場の騎射の日、車の下簾から女の顔がかすかに見えたので、中将である男と女のやりとりがなされる。

見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やな
がめ暮らさむ

知る知らぬ何かあやなくわきて言はむ思ひのみこそし
るべなりけれ

この贈答歌は『古今集』恋一では作者業平と読人知らずと

して、詞書もほぼ同じ事情である。物語では女の歌の後に「後は誰と知りにけり」とある。女に逢ったことをも言うのであろう。女の歌では、男の歌の意を上句で受け、知る知らぬは問題ではないとして、下句ではその上に立って「思ひ(灯)」だけが道案内になるのだとする。それに男が応じたのであろう。この懸詞によって女自身の心よりもむしろ女の求める男の心を具象化して示していると言え

る。百二十三段では、男が深草に住む女を次第に飽きてきたことから男と女との間に次のやりとりがなされる。

年を経て住み来し里を出でていなばいとど深草野とや
なりなむ
野とならば鶉となりて鳴きをらむかりにだにやは君は

来ざらむ

この贈答歌は『古今集』雑下では作者業平と読人知らずとして、詞書が「深草の里に住み侍りて、京へまうで来てとそこなりける人に詠みて贈りける」とあり、返歌も二三句が「鶉と鳴きて年は経む」とある。物語の「鶉となりて鳴きをらむ」の方が、男の歌の下句により即した形になっている。しかも女の歌の下句の「狩り」との結び付きも強くなる。女の歌の後には「と詠めりけるにめでて、行かむと

思ふ心なくなりにけり」とある。女の歌では、「狩り」に仮りを懸け、仮りにでもあなたは来ないことがあるうかとする。そこには男をひたすら待ち続けようとする女の心に加えて、女の求める男の心が具象化されて示されていると言える。以上三例である。業平の歌で懸詞を用いてわが心を表わしても齟齬を生じている例は二段だけである。

次に業平の歌でないと思われる歌で懸詞を用いるものを、わが心を都合よく表わしている例と、齟齬を生じている例とに分ける。

前者：「思ひ(火)」(百二十一段)。以上、1例。

後者：「逢ふ期難み(杓・筐)」(二十八段)、「喪(裳)」

(四十四段)、「倦みわたる(海渡る)」(六十六段)、「

住み良し(住吉)」(六十八段)、「見る目(海松

布)」(七十段)、「恨み(浦見)」(七十二段)、「縁

(江)」(九十六段)、「目くはせ(布食はせ)」(百四

段)。以上、計8例。

前者は業平の歌と贈答歌になっている三例も加えて四例、後者は業平の歌一例も加えて九例であり、両方合わせると十三例になる。前者では前の贈答歌も併せて全部贈答歌である。結果も前の贈答歌では二人の仲が進展したり好転したりする例があった。後者では贈答歌はなく、題を出され

て詠むのが一例（六十八段）ある。また逆接表現（二十八段、六十八段、七十二段、九十六段）や否定表現（四十四段）が見られる。結果も、特におもしろい歌であるとすると例（四十四段）、他の人が同情する例（六十六段）、他の人が詠まなくなる例（六十八段）がある。前者よりも後者の方が多いのは、懸詞によって文脈がそれ、結果として実際の場面から離れてしまうからではないかと考えられる。

物名を詠み込むものも二つに分ける。

前者：「引敷物（ひじき藻）」（三段）、「燠のゐて（おきのゐて）・都島辺（都島）」（百十五段）。以上、計2例。

後者：「時しも（雉）」（九十八段）。以上、1例。

物名の歌は両方で三例である。後者の九十八段の歌には否定表現が見られる。また歌も奇抜な着想であることを讃められたのであろう。

七、言葉の意味の転用

懸詞は一つの言葉に他の言葉を重ねるが、これは一つの言葉であってその意味を他の意味に転用するものである。これによってわが心を都合よく表わしている例から見ても

く。百二十五段を掲げる。

昔、男、わづらひて心地死ぬべくおぼえければ、

つひにゆく道とはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりしを

この歌は『古今集』哀傷に作者業平として、詞書が「病して弱くなりける時詠める」とある。物語では、現実のこととなった死を「つひにゆく道」とする。それによって観念でまだ先と考えていたことが目前に迫ったとまどいを表わすのである。

四十七段では、男が心をこめて何とかして思う女がいたが、女の方ではこの男を浮気だと聞いて一層冷淡な態度をとりながら、男と次のようなやりとりをする。

大幣の引く手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ

大幣と名にこそ立てれ流れてもつひに寄る瀬はありといふものを

この贈答歌は『古今集』恋四に作者読人知らずと業平として、「ある女の、業平朝臣を所定めず歩きすと思ひて詠みて遣しける」とある。男の歌では、女の歌の意を上二句で受け、それ以下で大幣が流れても最後には「寄る瀬」があるように今はいろいろな女の所に行っても最後に行き着く

所はあなたの外にはないと言う。その男の心を冒頭の一文の「ねむごろにいかでと男ふ女ありけり」が裏付けているのである。以上二例である。

次に四段では、東の五条の、太后宮の西の対に住む人にもとからの意図ではなかったがその人を思う心の深い人が訪れていたが、正月の十日頃に姿を隠してしまう、翌年の正月に去年のことを恋しく思っ行って去年とは全く違う様子の中で次の歌を詠む。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

この歌は『古今集』恋五に作者業平として、詞書もほぼ同じ事情である。ただし「心ざし深かりける人」という人物や、「立ちて見、みて見、見れど、去年に似るべくもあらず」という場面の設定はない。物語では、「月」や「春」は去年を偲ばせる筈のものであったが現実には同じでなかった。変わらぬわが身やその人を思う心に対して月や春は変わってしまったのではないかとするのである。その月や春に齟齬を感じているところに女を失った悲しみの心が具象化されているのである。

四十八段では、男は馬の餞をしようとして人を待っていたのに来なかったので次の歌を詠む。

今ぞ知る苦しきものと人待たむ里をば離れず訪ふべかりけり

この歌は『古今集』雑下に作者業平として、詞書は、紀利貞が阿波介になったので馬の餞をしようとして今日と言ったが、あちこち歩き廻って夜が更けるまで来なかったので贈った歌となっている。気心の知れた者同志の戯れのようにとれる。物語では、男のことを、女が男を待っている所という意の「人待たむ里」とし、それによって待つ身の辛さを測り知れぬほど味ったのである。

八十段では、衰えた家に藤の花を植えた人があり、三月下旬の雨がしとしと降る日、人の許へ折ってさし上げるといので次の歌を詠む。

濡れつつぞしひて折りつる年の内に春は幾日もあらじと思へば

この歌は『古今集』春下に作者業平として、詞書も骨子は同じ事情であるが、物語の「衰へたる家に藤の花植えたる人ありけり」という人物の設定はない。物語では、三月を「春」とし、それによって一年の中で最も惜しむべき季節であり、また藤の花の咲いている季節という意を持たせている。この人が衰えた家の人であるだけに季節や花の移ろいに対してとりわけ愛惜の心が深かったと思われるのであ

る。

八十八段では、それほど若くはないあれこれの友達が集まって月を見て、その中の一人が次の歌を詠む。

大方は月をもめでじこれぞこの積もれば人の老いとなるもの

この歌は『古今集』雑上に作者業平とするが題知らずの歌である。物語では、「月」を年月の意と捉え、老いをもたらすものとする。主人公は風流の中に過ぎ行く齢を感じる、特異な感受性の持主である。

八十四段では、男は身分は低いが母は宮であり、その母は長岡に住んでいる、子は宮仕えがあって行きたいが再々は行けない、一人子であるので母は大変にかわいがっている、十二月の時分に急用と行って手紙がある、その母と子のやりとりである。

老いぬればさらぬ別れのありといへばいよいよ見まく
ほしき君かな

世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もと祈る人の子のため

この贈答歌は『古今集』雑上に作者業平の母の親王と業平とし、詞書もおおよそ同じ事情であるが、特に「ひとつ子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり」という部分

はない。また業平の歌の四句は「千代もと歎く」となっている。物語では、男の歌の上句で母の歌の意を受け、その上で下句において、自身を「人の子」とし、母にいつまでも生きていてほしいと思うのは子たるものの願いであるとする。しかし、『古今集』が「千代もと歎く」とするよう
に「千代もと祈る」のは「人の子」の通性ではないかも知れない。実は「人の子」と言っているだけで、そこにむしろ男の、母への個有の心が込められていると見るべきである。これは地の文で「子は京に……」「ひとつ子にさへ」、「かの子」と、母宮の子としての立場が強調されていることからそう考えられるのである。

八十二段は三段落からなり、それぞれの業平の歌は他の歌の前にあたり、贈歌であったりして中心的にはない。惟喬親王は桜の花盛りには水無瀬に行き、右の馬頭をいつも連れて行ったが、狩には熱心でもなく酒を飲んで歌を作っていた。交野の渚の院では桜の下で上中下皆が歌を詠むが、その時の馬頭と人の歌である。

世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし

散ればこそいとど桜はめでたけれ憂き世に何か久しかるべき

前の歌は『古今集』春上に作者業平として、詞書も骨子は同じ事情である。後の歌は同春下に題知らず、詠人知らずの「残りなく散るぞめでたき桜花ありて世の中果ての憂ければ」という類歌がある。前の歌では桜を惜しむ心を桜がなかったらという形で表わすが、後の歌では逆に散るからこそいいのだとした上で、「久しかる」ものの中に桜の散らないことも含めて、いつまでも続くものはないという世の理を持ち出し桜の散るのを諦めようとする。次の天の河では、親王が「交野を狩りて天の河の辺りに至る」を題として歌を詠んで盃はさせと仰せになる。馬頭と親王の代りの紀有常のやりとりである。

狩り暮らしたなばたつめに宿借らむ天の河原にわれは
来にけり

一年に一度来ます君待てば宿貸す人もあらじとぞ思ふ
この贈答歌は『古今集』羈旅に作者業平と有常として、詞書もほぼ同様の事情である。物語では、有常の歌は馬頭の歌の意を受け、前の人の歌のように理を持ち出して、一年に一度おいでになる方を待っているで宿を貸してくれる人などあるまいと言うが、たなばたのことを「宿貸す人」とすることによってあなたのような人を相手にする人もあるまいという意を込めたと見られる。最後の水無瀬の宮で

は、夜が更けるまで酒を飲み物語をして親王が酔って入ろうとし、十一日の月も隠れようとするので馬頭と親王の代りの有常が次のようなやりとりをする。

飽かなくにまだきも月の隠るるか山の端逃げて入れず
もあらなむ

おしなべて峰もたひらになりなむ山の端なくは月も
入らじを

前の歌は『古今集』雑上に作者業平として、詞書もほぼ同様の事情である。後の歌は『後撰集』雑上の上野岑雄の歌であり、五句が「月も隠れじ」となっている。馬頭の歌で山の端が逃げて月を人れないでほしいとするのに対して、有常の歌では、ここでは理を持ち出さないので逆に一樣に峰も平らになってしまえばよい、山の端がなければ月も入らないからとする。この「おしなべて」は「山の端逃げて」に対して、押し立てならすという意を持つと思われるが、それを一樣にどこもかしこもという意に用いることによってますます不可能な注文をしていることになる。なお最初の馬頭の歌では気を揉むゆえに桜がなければとするが、これは月の隠れる山の端の方がなければとするので首尾対応している。以上、後者では業平の歌が五例、その他が三例ある。

前者では贈答歌が一例、後者では三例、また相並んで詠まれた歌が一例あるが、前者が相手の歌の意をふまえてわが心を述べるのに対し、後者はそれを否定してわが心を述べるのである。また後者には否定表現（それに疑問、推量、意志などが加わっている）が四例見られる。そして、後者には業平の歌が特に多い。これは比喻を用いた歌の前者に多いことと対をなしていると見られる。

次に業平の歌でないで見られる歌で言葉の意味の転用をしているものを、わが心を都合よく表わしている例と、齟齬を生じている例とに分けてみる。

前者：「帰る（男・波）」（七段）、「巡り逢ふ（月、男）」（十一段）、「花（春宮女御）」（二十九段）、「（紐を）解かじ（他の男に逢わない）」（三十七段）、「消ゆ（ともし・崇子の魂）」（三十九段）、「そのこととなく（夏の日暮らし・人の娘の死）」（四十五段）、「夜深き（心）」（五十三段）、「折節（言の葉）」（五十五段）、「（波の）濡衣」[※]（六十一段）、「衣片敷き（二人寝）」（六十三段）、「無き名（人・神）」（八十九段）、「春の限り（三月下旬）」（九十一段）、「なぞへなく（身分の高下・苦しみ）」（九十三段）、「あだに（花・人）」（百九段）、「下紐の解けむ（恋

しく思う）」（百十一段）、「短き（心）」（百十三段）、「あだ（男・形見）」[※]（百十九段）。以上、計17例。

後者：「消え（露・人）」（六段）、「移ろふ色（心）」（二十段）、「（言葉）残り（情愛）」（二十二段）、「心一つ（胸）」（三十四段）、「恋（人を待つこと）」（三十八段）、「まさる（思い・別れ難き）」（四十四段）、「面影に立つ（忘れないこと）」（四十六段）、「狩る（刈り）」（五十二段）、「落穂拾ふ（落ちぶれること）」（五十八段）、「まさり顔なき（泣き顔・身の上が良くない）」（六十二段）、「おのが様々（各自各様・別々の生き方をして）」（八十六段）、「しのぶ（しのぶ草）」（百段）、「鍋の数（契った男の数）」（百二十段）、「われと等しき人（同じ考えの人）」（百二十四段）。以上、計14例。

前者は業平の歌も加えて十九例、後者は業平の歌及びそれに合わせられた歌も加えて二十二例で、両方では四十一例になる。ここでは自然物及びそれに近いものとの関りにおいてわが心を表わす例が前者では半数弱、後者では半数強ある。また名詞の他に動詞が多いと言えるが、これは業平の歌には見られない特徴で、特に後者に多い。贈答歌は前者に四例（三十七段、三十九段、六十一段、百十一段）、

他一例（四十五段）がある。後者には三例（二十段、二十二段、三十八段）、他に言葉に答えた歌が三例（四十六段、五十八段、百段）ある。女の歌は前者が四例、後者が二例ある。後者には否定表現（二十段、四十六段、六十二段、八十六段、百二十四段）、反実仮想の表現（六段、五十八段）、逆接表現（二十二段、百段）などがある。結果も、前者では色好みの歌としては平凡であるとす例（三十九段）や男が歌に動かされて女と寝る例（六十三段）がある。後者では二人の仲が前よりよくなる例（二十二段）もあるが、女が男の前から姿を消す例（六十二段）や今までのことに終止符をうって新しい生活に踏み出す例（八十六段）がある。

おわりに

『伊勢物語』では主人公の心を表わすのに二つの方法がある。一つは初段のように物に寄せて心を都合よく表わすのである。これには奇数章段が該当する。もう一つは二段のように物に寄せて心を表わすのであるが、それが詠み手との間に齟齬を生じるのである。これには偶数章段が該当する。前者では歌は相手と共通の立場で詠まれている。これは後者に比べて贈答歌が比較的多い（22対14）ことも

関りがあると見られる。その歌は主人公の心を巧みに表わすだけでなく、人の心をも代りに表わすことがある。結果として歌が讃められたり、二人の仲が好転したりすることが多いのである。これには後者に比べて女の歌が多い（16対9）ことも関っているであろう。後者では歌は相手と異なる立場で詠まれている。贈答歌でも相手の言うことを否定した上でわが心を述べている。また歌の中に否定、逆接、反実仮想等の表現が多く見られる。ここでは主人公の独自の心が深く込められているのである。結果も二人の仲は進展しなかったり、よくない結末を招いたりすることがある。なお業平の歌は『古今集』に三十首あり、物語ではそれが全部あるが、その中二十四首がその段の中心的位置にある。そしてその十六首が前者に、八首が後者にある。数の上では前者が前面に出ている。

さて主人公の心を具象化する方法として、序詞、枕詞、比喩、見立て、擬人法、懸詞（物名も含む）、言葉の意味の転用などがある。これらは実際の場面と結び付くことによって心を具象化して表わしている。その数を挙げると、序詞13―前者9（1）、後者4（0）（かっこ内は業平の歌）、枕詞7―前者4（0）、後者3（1）、比喩35―前者20（9）、後者15―（0）、見立て8―前者6（2）、後者

2 (0)、擬人法18—前者10(2)、後者8(1)、懸詞(物名)16—前者6(0)、後者10(1)、言葉の意味の転用41—前者19(2)、後者22(5)となる。最も多いのは言葉の意味の転用で、それに比喩が次ぐ。これに伴って業平の歌でも言葉の意味の転用は後者に多く、比喩は前者に多い。『古今集』時代に多くなると言われる見立てや懸詞はそれほどを一緒にしたものと言葉の意味の転用とはほぼ並ぶことになる。そして序詞は前者に近く、懸詞は後者に近いとすれば、初段と二段は心の具象化の二つの方向を示したものと見ることが出来る。序詞は場面に関っていく傾向を持つものであり、懸詞は場面から離れていく傾向を持つものである。なお枕詞は序詞と、擬人法は比喩と同じに見てよいと思われる。

注1 菊地靖彦氏「伊勢物語私論—主として伝承と反古今との視点から—」(『国語と国文学』昭和49年11月)

2 室伏信助氏「伊勢物語の歌の性格—古今集所収業平歌を含む段をめぐって—」(『中古文学』第二号昭和43年3月)

3 『日本古典文学全集』による。以下本文の引用は同書による。なお表記を改めたところがある。

4 『伊勢物語愚見抄』に「をいつきて」を「やがてとりあ

へずよみてやる心なり」(片桐洋一氏著『伊勢物語の研究』(資料編)509頁)とする。

5 『日本古典文学全集』による。以下本文の引用は同書による。なお表記を改めたところがある。「乱れむと思ふ」は元永本では「乱れそめにし」となっている。

6 『鑑賞日本古典文学』、『講談社文庫』など。

7 『知頭集』、『惟清抄』。

8 『伊勢物語私記』、『伊勢物語評釈』、『日本古典文学全集』、『伊勢物語全釈』、『新版伊勢物語』。

9 『講談社文庫』補注96頁。

10 『伊勢物語新釈』、『鑑賞日本の古典』、『新潮日本古典集成』。

11 『愚見抄』の説。清水文雄氏もこれが妥当であるとされている。「いちはやきみやび」(『源氏物語その文芸的形成』所収12頁)。

12 『伊勢物語』の「みやび」については、「やはり好色の面のなほ保たれている用法」(犬塚旦氏「みやび攷」(『王朝美的語詞の研究』所収302頁))、「人間的な愛情として表現される『直なる心』」(片桐洋一氏「伊勢物語根本—その虚構と方法」(『源氏物語とその周辺』所収28頁))と捉えられ、「いちはやきみやび」については、「初々しさをも見いだせようが、やはりここ変わらずに真一文字に行動する奔放さに重点を置いてはどうか」(森野宗明氏「みやび」(『国文学解釈と鑑賞』昭和52年1月))などと説かれている。

- 13 「伊勢物語の初段と二段」(『文学論藻』第48号昭和48年12月)。
- 14 『新版伊勢物語』16頁。
- 15 片桐洋一氏が『古今集』業平歌も「簾や几帳を隔てながらも夜もすから」物言ひ「明かしたとも解し得る」(『伊勢物語』冒頭三章段の成立と主題)(『中古文学』第二十九号昭和57年5月)とされるのに従う。
- 16 拙稿「伊勢物語初段と二段―作者の批評の言葉について―」(『国語国文学誌』第10号昭和55年12月)
- 17 『日本古典文学大系』、『新潮日本古典集成』。
- 18 『日本古典文学全集』。
- 19 『講談社学術文庫』。
- 20 小沢正夫氏著『古今集の世界』125頁。

(本学助教授)